

A night sky with a full moon in the top right corner. Two shooting stars with long, thin trails are streaking across the sky from the top left towards the bottom right. The sky is filled with numerous small, white stars. At the bottom of the image, there is a horizontal band of a dense field of small, white stars, suggesting a starry field or a distant galaxy.

流れる星に願いを



流れる星に願いを



静かにオルゴール音が流れる
舞台の幕が上がる
ノアとイヴがスポットライトに照らされる
星空と月が二人の上で静かに光っている

ノア 「昔、あるところに、心優しい人形職人のおじいさんがいました。
おじいさんは子どもがほしいと思っていました。」

イヴ 「そこで、おじいさんは人形の子どもを作って、
『ピノキオ』という名前をつけました。」

ノア 「その夜、おじいさんが眠りについたあとに女神様がピノキオの
もとへやって来ました。」

イヴ 「そして、ピノキオに命をさずけこう言いました。」

ノア 「『ピノキオ、いい子にしていればあなたは、本当の人間になれますよ。』と。」

オルゴール音がふいにとまる

二人 「本当の人間になれますよ。」

スポットライトフェードアウト
暗転



明転

ある研究所の施設内

ノアがピノキオの絵本を読んでいる

読んでいる途中で涙を落とすノア

そこへ博士が入ってくる

最初はノアが泣いているのを見ているだけだが、

ノアが絵本に目を戻したところで声をかける

博士 「ノア・・・？」

ノア 「はい、博士。（涙を拭って） 何でしょうか？」

博士 「ノア、あなたにお願いしたいことがあるんだけど、いいかしら？」

ノア 「・・・・・・・・。」

博士 「例のアンドロイドのこと、前に何度か話したわよね？」

ノア 「あ、はい。たしかまだ実験中でしたよね。」

博士 「正確には、まだとは言わないかもしれないわね。」

ノア 「・・・どうのことですか？」

博士 「もうすぐ実験期間が終わるの。あと一週間。」

ノア 「実験開始からもうそんなに経つんですね。」

博士 「あなたにお願いしたいことがあるんだけど。」



ノア 「何ですか・・・？」

博士 「最後の実験を、あなたにやってもらいたいの。」

ノア 「・・・え？」

博士 「あの娘の最後の一週間を、あなたにやってもらいたいの。」

ノア 「え？どういうことですか？どうして私がそんな大事なことを・・・」

博士 「(さえぎって) 最後の実験に関しては、あなたじゃないとできないと
私たちは判断した。」

ノア 「どうしてですか・・・？」

博士 「その答えは、実験が終わればわかることでしょう。」

ノア 「・・・・・・・・。」

博士 「突然こんなことをあなたにお願いすることはよくないとわかっているわ。」

ノア 「・・・・・・・・。」

博士 「だけど、とても大切なことなの。これまでの実験の中で最もね。
この実験はあなたじゃないとダメなの。やってもらえないかしら？」

ノア 「・・・・・・・・」



sean1-3

博士 「ノア、お願い・・・」

少しの沈黙

ノア 「・・・わかりました。引き受けます。」

博士 「ありがとう、ノア。
それじゃあ、早速向かってちょうだい。彼女は中心部の庭園にいるから、
あなたが中心部に出入りできるように処理しておくわ。」

ノア 「はい・・・。」

博士 「じゃあ、私はそろそろ行くわね。あと、お願いね。」

博士出ようとする

ノア 「博士。」

博士 「何かしら。」

ノア 「あの、この実験が終わったらどうなるんですか？」

博士 「・・・というと？」

ノア 「（何か言いかけるが、言葉につまって） いえ、すみません。
何でもないです。」

博士出ていく
同時に暗転
音響が流れる



明転

イヴが一人でベンチに座ってる

庭園にはベンチ以外に目立つものはなくどこかものさみしい

そこへノアが入ってくる

イヴがノアに気づき自分の隣を空ける

そこにノアが座る

音響がフェードアウトする

しばらく間

ノアは落ち着かないらしく、そわそわしている

ノア 「・・・あの」

イヴ 「最後の実験。」

ノア 「え・・・？」

イヴ 「これ、私の最後の実験なんですよ？」

ノア 「知ってたの？」

イヴ 「そんな気がしただけ。・・・ねえ、聞いてもいい？」

ノア 「なに？」

イヴ 「最後の実験って何するの？」

ノア 「私はただ一週間あなた・・・
えっと、ごめん、名前は何ていうのかな？ 聞いてないんだ。」



イヴ 「イヴ。PTR-2102-type001号 イヴ。」

ノア 「わかった。イヴ、私にもよくわからないんだけど、私は一週間あなたと過ごすように言われたの。それが実験内容みたい。」

イヴ 「あなたと一緒に一週間は過ごすことが・・・？」

ノア 「ええ、そうよ。」

イヴ 「そうなんだ。最後の割には、ちょっと拍子抜けしちゃう。」

ノア 「今までどんな実験してきたの？」

イヴ 「いろいろ。毎日身長や体重や髪の毛がどれくらい伸びたかを計ったり、わけのわからない質問をされたり。」

ノア 「そっか・・・」

イヴ 「名前」

ノア 「え？」

イヴ 「名前。あなたの名前は？」

ノア 「あ、ごめん。私の名前はノア。」

イヴ 「ノア？ノアって、『ノアの箱舟』の？」

ノア 「多分、違うと思う。」

イヴ 「ふうん。」



ノア 「『ノアの箱舟』知ってるんだね。」

イヴ 「うん。このまえ実験で聖書読んだから。」

ノア 「そうなんだ。」

イヴ 「私って、『アダムとイヴ』の『イヴ』からこの名前がついたのかな。」

ノア 「そうかもね。」

イヴ 「どうして？」

ノア 「それは、よくわからないよ。」

イヴ 「なんで？」

ノア 「なんで、って・・・（少し困って）」

イヴはノアをじーっと覗き込む

ノア 「（思いついて）あのね、多分・・・イヴは『イヴ』っていうから、イヴなんだよ!!」

イヴ 「それって、・・・答えになってないよ？」

ノア 「あ・・・うん、そう・・・かも。」

イヴ 「（少し笑って） なんだか、ノアって変わってるね。」

ノア 「え・・・そう？」



イヴ 「だって、今までここに来てる人たちと、全然ちがう。」

ノア 「そっか。」

イヴ 「うん、なんだかあたたかい。」

ノア 「・・・・・・・・。」

突然あたりにベルが鳴り響き、
鳴り終わりかけたところで、
照明が昼から夜に変わる
静かに虫の音がきこえてきだす

イヴ 「夜が流れてきた。」

ノア 「・・・え？」

イヴ 「だって、青空が流れて、夜空が流れてきたんだもん。」

ノア 「（空を見上げて） そうだね。」

イヴ 「不思議だよね。」

ノアはイヴを見る

イヴ 「あんなにまぶしかったのに、今はこんなにしずかに光っている。」



虫の音がしずかに響いて、
風のかすかに聞こえてくる
月がしずかに光っている

ノア 「(立ち上がって) あっ、流れ星!!」

ノアは手を組んで黙って何かを願う

イヴ 「何してんの？」

ノア 「流れ星に願い事をしたの。」

イヴ 「ながればし・・・？」

ノア 「あ、えっとね・・・時々すごく早いスピードで流れる星がいるの。それが・・・」

イヴ 「流れ星？」

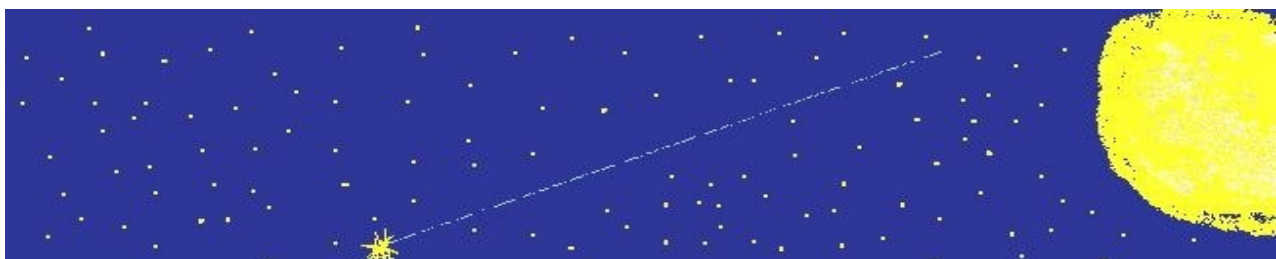
ノア 「うん、それでね、その流れ星を見たら、
消えちゃう前に願い事を3回となえるの。そうしたら、願い事がかなうんだ。」

イヴ 「ふうん。」

ノア 「・・・でも、変だよね。」

イヴは悲しそうなノアを見る

ノア 「だって、星を見つけて、願い事を3回言ってる間に消えちゃうんだもん。
早く消えちゃうから願い事できないよ。」



イヴ 「・・・私もしたかったな。」

ノア 「願いごと？」

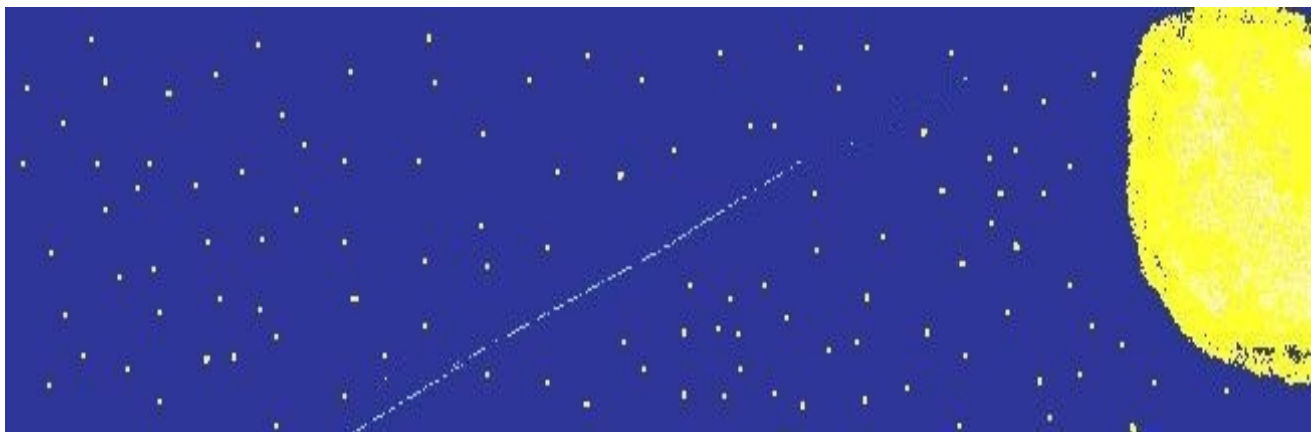
イヴ 「うん。」

ノア 「・・・きれいだね。」

イヴ 「何が？」

ノア 「夜が・・・？」

二人は静かに夜空を見上げる
音響が流れ出し、
月以外の照明が消えて、
風のかすかに聞こえる
月が消えて、
暗転



月が静かに表れる

スポットライトがノアを照らす

ノア 「見ないでっ・・・お父さん、お母さん・・・私のことそんな・・・
そんな目で見ないで・・・いや、やめてっ!!
いや、見ないで・・・見ないでっ!!」

ノアはすすり泣きながら、その場にうづくまる

ノアのスポットがフェードアウトされるのと同時に、

スポットライトがイヴを照らす

イヴ 「逃げていただけじゃない・・・生きていくことから、明日が来ることから。
・・・ちがう、心は止まっているんだから・・・」

イヴのスポットがフェードアウトされてから、

ノアにスポットライトがあたる

ノア 「女神様はピノキオに命をさずけこう言いました。」

イヴにスポットライトがあたる

イヴ 「『いい子にしていれば、本当の人間になれますよ。』」

二人 「いい子にしていれば・・・本当の人間になれますよ。」

ノアのスポットライトがフェードアウトされる

イヴはスポットライトに一人照らされた中、

その場にしゃがみこんで静かにすすり泣く

月が静かに光っている中イヴのスポットライトがフェードアウトされる

月が溶けるように夜空に消える

暗転





sean4-1

明転

中庭のベンチにノアが一人で座っている

雨が降っている

太陽は見えない

ノアは傘もささずにただぼーっとしている

そこへ博士が傘をさしてやってくる

博士 「雨・・・やみそうにないわね。」

ノア 「はい・・・」

博士 「隣いいかしら・・・？」

ノアは自分の隣を空けて、

そこへ博士が持っている傘の半分以上をノアにさして座る

雨が降る音がする

それ以外に音はなく、あたりはしんとしている

雨の音を除いて沈黙が漂う

博士 「あなたがここに戻ってきた日も雨だったわね。」

ノア 「・・・・・・・・。」

博士 「ノア、知ってる？雨の日には神様が降りてくるのよ。」

ノア 「神様・・・？」

博士 「あの日も、そうだったのかしら。これも運命なんだって・・・」



ノア 「・・・どうして？」

博士 「・・・？」

ノア 「どうして・・・こんなことに・・・」

博士 「(さえぎって) ノア、本当にごめんなさい。」

ノア 「・・・・・・・・。」

博士 「あなを見るたびにいつも思うわ。私たちがあなたにしたことは、
本当はとても残酷なことなんだって・・・」

ノア 「・・・・・・・・。」

少しの間

雨の音がほんのわずかに響く

博士 「ノア、例の・・・あのこと考えてくれたかしら？」

ノア 「すみません・・・まだなんです。」

博士 「そう・・・」

ノア 「・・・自分でもわからないんです。
処置を施せば・・・ここに戻ってくる前のことを忘れることができれば・・・
どんなに楽になれるんだろうっていつも思います。・・・でも・・・」

ノアは言葉につまってしまう



博士 「たしかに、いずれを選んでもつらい選択ね。処置を施したとしてもどこか満たされないものは残ってしまうかもしれないわ。」

ノア 「・・・・・・・・。」

博士 「だけど、可能性はある。
記憶を消すことで、今よりも楽に生きられる可能性がね。」

ノア 「・・・・・・・・。」

博士 「ノア、急ぐことはないから、よく考えて。その上で答えを出して。」

ノア 「・・・はい。」

博士はベンチから立って傘をノアに渡してその場から去る

ノアはしばらく茫然としているが、
傘を手から落としてその場に伏せて泣く
雨の音は静かに響くばかりである

イヴが傘をさして入ってくる
伏せているノアを見て、あわててかけよる
落ちていた傘を拾って、ノアにさす
泣いている人を目の前にして、どうしたらいいのかイヴはわからない

イヴ 「・・・ノア？」

ノア 「（少しあわてて） ごめんなさい、何でもないの。」

イヴ 「うん・・・」



イヴはだまってベンチに座る
少し間

イヴ 「・・・ねえ。」

ノア 「なに？」

イヴ 「どうしたの・・・？」

ノア 「え？」

イヴ 「さっき目から水が流れていたよ。」

ノア 「イヴには・・・関係ないよ。」

イヴ 「どうして？」

ノア 「イヴにわかることじゃないよ・・・」

イヴ 「(さえぎって) わからないよ。
でもわかるとかわからないとかどうでもいい。
だってノアがたった一人で泣いているんだもん。」

ノア 「一人で・・・」

イヴ 「かなしい。一人で・・・泣いたりしないで。」



イヴはノアを見つめる
ノアは少しうつむいてしまう
しばらくの沈黙

ノア 「ずっと、ずっと昔のことなんだけど・・・私、本当はここにいたんじゃない。
両親がいて、友達がいて、どこにでもいる毎日が平凡な女の子だった。」

ノアは静かに語りだす

イヴ 「・・・うん。」

ノア 「だけど、突然の事故で私は死んじゃったの。
両親はこの研究所に頼んだの。私を生き返らせてくれって。」

イヴ 「・・・・・・・・。」

ノア 「長い研究を終えて生き返った私は両親のもとへ帰った。
最初は両親も喜んで、何もなかったようにもとに戻れたみたいだったの。
それからしばらくのことだった・・・両親が・・・お父さんとお母さんが・・・
あの、つめたい静かな目で、私のことを見るようになったのは・・・」

イヴ 「・・・・・・・・。」

ノア 「それからお父さんはほとんど帰ってこなくなって、
お母さんは家事をしなくなって、家は日に日に荒れて行って・・・
私、こわかった。お父さんと、お母さんがこわれていく・・・
私のせいで・・・私がいるから・・・」

イヴ 「うん・・・」



ノア 「そして、最初にお父さんが・・・そのあとを追うようにお母さんが・・・
そのあと私はどこにも身寄りがあるはずもなく・・・
ここに戻ってきたの。私が生き返ったこの場所に・・・」

イヴ 「ノア・・・」

ノア 「・・・もう、いや・・・あの時の記憶をこのまま忘れる事も許されないまま、
ここにあり続けるのは、もう無理よ・・・
消えて・・・このままあの日もあの時も全部・・・すべて・・・」

イヴ 「(さえぎって) そんなの逃げているだけじゃない・・・
生きていくことから、明日がくることから・・・自分の記憶から。」

ノア 「私、逃げていない・・・だって、私今まで、ずっと・・・」

イヴ 「ちがう、心はずっと記憶の中で止まっているんだもん。」

ノア 「・・・・・・・・。」

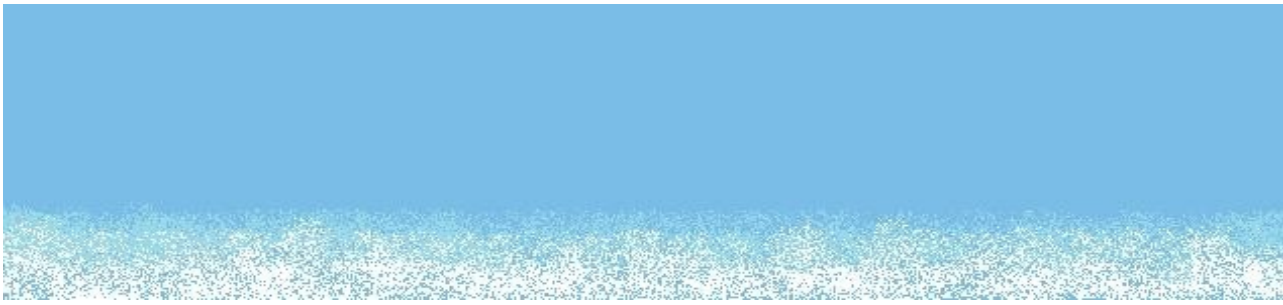
イヴ 「この実験・・・私の実験が終わったら、私がどうなるかきいてる？」

ノアはだまって首をふる

イヴ 「私のバッテリーは、
はじめから実験期間の日数分しか内蔵されていないの。
これ、どういうことかわかるでしょ・・・？」

ノア 「・・・・・・・・。」

イヴ 「最後にノアと過ごす時間が終わったら、私は・・・
私のすべてがストップしちゃうの。」



ノア 「・・・・・・・・。」

イヴ 「私は、私が生まれた時から、実験は始まって、私の存在自体が実験みたいで。生まれたときは、感情も心もほとんどなかったけど、心ができていくたびに、『実験』は私を苦しめた。私の生きている意味は『実験』のためだけなの・・・？」

ノア 「・・・・・・・・。」

イヴ 「だけど、初めてあの空を見たときわかったの。生きているいみなんてなんでもない。あの空があって私が生きている。ただそれだけすごいで、尊いことなんだってわかった。」

ノア 「・・・・・・・・。」

イヴ 「だから私は、たとえ決して長くはない私の時間の中でも、しっかりとまっすぐに見つめて生きていこうって。決めた。」

ノアはイヴを見つめる

イヴ 「どんなに忘りたい過去でも、忘れられない記憶も・・・きっと忘れちゃいけないんだよ。だってそのひとつひとつが自分の一部なんだもん。」

ノア 「それでも・・・もしかなしくなったら・・・？」

イヴ 「かなしいときだって、あるよ。それが明日へ歩くことでしょ？」

ノア 「（涙ぐみながら） うん・・・うんっ！」



ベルが鳴り響き、夜になる
月と星が静かに光る
風の音が静かにきこえる

イヴ 「夜が流れてきたね・・・」

ノア 「うん・・・」

二人は夜空を見上げる

イヴ 「あっ！」

イヴは空のほうを指差す
その先をノアも見る

イヴ 「今の・・・流れ星？」

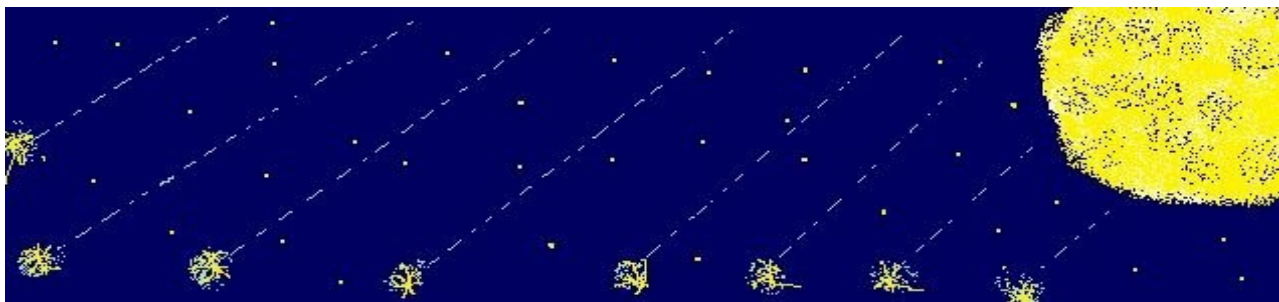
ノア 「あっ、あっちにも！」

流れ星が夜空を数多に流れていく
流星雨
音響が流れ込む
二人は夜空に見入ってしまう

イヴ 「たくさん流れてる・・・」

ノア 「流星雨だよ・・・すごくきれい・・・」

イヴ 「流れて、こぼれてきてるみたい・・・」



ノア 「夜空に吸いこまれそう・・・」

二人は夜空をしばらく見つめる

イヴ 「ねえ、願い事をしようよ。」

ノア 「でも、すぐに消えちゃうよ。」

イヴ 「消えたりしないよ。だってずっと流れてるんだよ。
きっとこの世界のまわりをずっと・・・だから消えたりしないよ。
星も、願いも。」

ノア 「・・・うん。」

イヴ 「何て願うの？」

ノア 「忘れませんようにって。
あの日のことも、お父さんとお母さんのこと忘れてりしませんようにって。」

イヴ 「うん、いい願い。」

ノア 「イヴは？」

イヴ 「私？私は・・・」

ノアはイヴを見つめる

イヴ 「もし、もう一度生まれることができるのであれば、
流れ星にしてください。この世界をずっと・・・
ずっと、ずっと流れているような星にしてくださいって。」

ノア 「・・・うん。」

風の音が聞こえる

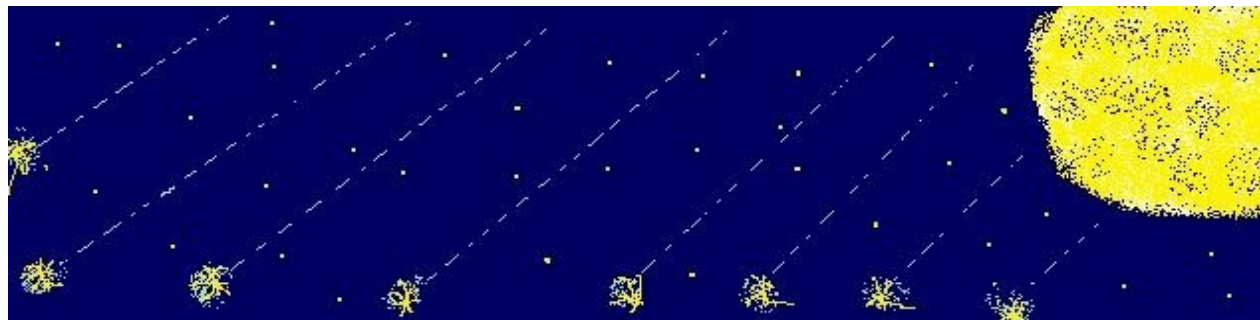
二人は星々が流れるのを見つめている

イヴが手を組んで願いごとをする

それを見て、ノアも静かに願う

照明がフェードアウトし、

月と星が静かに輝いている
音響がフェードアウトされ、
暗転



明転

天気は晴れ。穏やかな日。

ベンチにはイヴと博士が座っている

二人は空を眺めている

博士 「突然こういうことが起こるときもあるのね・・・」

イヴ 「ノアは・・・どこにいるの？」

博士 「遠い星に行ってしまったわ。遠い遠い果てしない星にね。」

イヴ 「・・・・・・・・。」

博士 「昨日の朝のことだったわ。

いつまでたっても起きてこないから様子を見に行ったの。

何をしても、もう起きることはなかったわ。

眠りながら、行ってしまったんでしょうね。」

イヴ 「ノアは・・・これでよかったのかな？」

博士 「きっと、これが彼女にとってのハッピーエンドみたなものだったかもしれないわ。」

しばらく間

風の音が穏やかにあたりに響く

博士 「私はそろそろ行くわね。私たちにはやるべき課題がまだ残ってるし。」

博士去ろうとする



イヴ 「博士!!」

博士は歩みを止める

イヴ 「私はどうして生きているんですか？
実験期間は過ぎたのに・・・どうして・・・」

博士 「（ふりかえって） 何のことかしら？私にはさっぱりわからないわ。」

穏やかな微笑みだけ残して、博士は去る

イヴはだまってベンチに座る

空は穏やかで、風の音が聞こえる

イヴは空を眺める

暗転



音響が流れてくる
月と星が静かに光る

スポットライトがイヴを照らす

イヴ 「むかしあるところに、心優しい人形職人のおじいさんがいました。
おじいさんは子どもがほしいと思っていました。
そこでおじいさんは人形の子どもを作って、『ピノキオ』という
名前をつけました。
その夜、おじいさんが眠りについたあとに女神様がピノキオの
もとへやって来ました。
そして、ピノキオに命をさずけこう言いました。
『ピノキオ、いい子にしていればあなたは、本当の人間になれますよ。』と。」

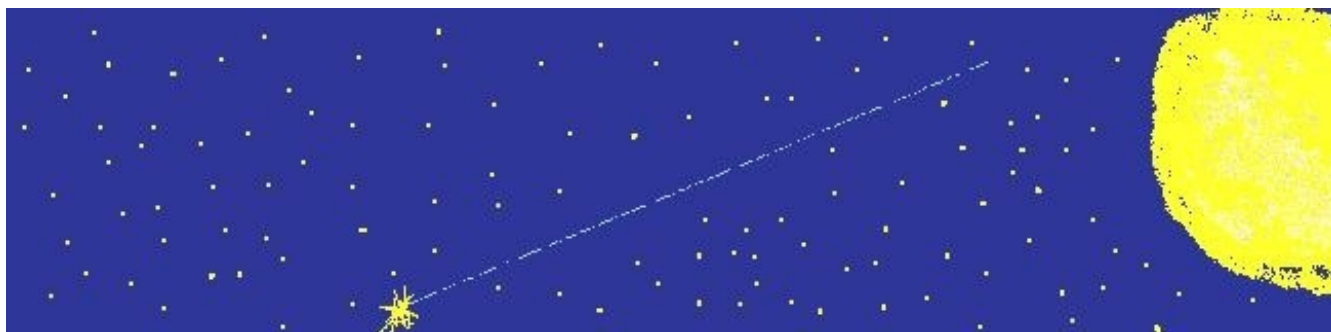
スポットライトがノアを照らす

ノア 「ピノキオは言いました。
『女神様、僕は決していい子ではありません。
うそもつくだろうし、悪いこともしちゃうだろうし、
時には生きていくことから逃げようとするかもしれません。
僕は人形の子どもでもかまいません。
そして、僕はその日その日を見つめて生きていきます。』」

音響がフェードアウトされ、
二人のスポットも消える
月と星が静かでたしかな光でかがやいている
月と星が消えるのといれかえに、
エンディングの音響が流れる
音響が流れる中で幕が静かにおりる



END



THE END

and thank you for you.

